



# 木材加工最前線

## Contents

- ◇木材高度加工研究所から
  - ・木材腐朽菌のリグノセルロース分解戦略 木高研 特任助教 元田 多一 . . . . . 2
  - ・研究成果を全国へ発信 木材学会広島大会での木高研関係者の発表テーマ . . . . . 2
- ◇木材加工推進機構から
  - ・WOODコレクション(モクコレ)2026 展示状況 . . . . . 3
  - ・令和7年度 第3回 秋田県原木需給会議から . . . . . 4~5
  - ・栗本教授が新所長に就任ほか . . . . . 6
  - ・推進機構の理事会 令和8年度の事業計画案などを承認 . . . . . 6
  - ・お知らせ(行事予定ほか) . . . . . 6

## WOODコレクション(モクコレ)2026へ秋田県ブース出展

東京都が主催する「WOODコレクション(モクコレ)2026」が2月12日と13日の両日、「国産木材が切り拓くミライの産業・社会・暮らし」をテーマに、建築やまちづくり、暮らしの中における木の活用事例を紹介する「日本全国・木の祭典」として、東京都江東区の東京ビッグサイト西ホールで開催されました。

「モクコレ」は、大消費地である東京での更なる木材利用の拡大に向けた日本各地の地域材を活用した建材や家具などの木材製品展示商談会で、2015(平成27)年の開催から今回で10回目となります。今回は39都道府県、320出展者・314小間が出展し、過去最多の7,000人を超える来場者がありました。

今回の「モクコレ」で秋田県からは、秋田県木材産業協同組合連合会、秋田COI-NEXT、北鹿地域林業成長産業化協議会の3者が共同出展しました。



秋田県ブースは、秋田公立美術大学の今中隆介教授(有限会社r-homeworks代表)監修のもと、3Dプリントを駆使した接合部材と県産材で構成される「森」をイメージした空間(6m×15m)の中に、出展事業者が一丸となって展示することとなりました。

構造材、造作材、内装材、役物製品、建具材、家具、木工製品など各種の木材製品を配置し、魅力的な空間を作り上げて秋田の森林・林業・木材産業の裾野の広さと奥深さを前面に打ち出し、紹介してまいりました。

また、ブース内にワークショップスペースを設け、多くの来場者に木に触れ、木を感じていただきました。



(モクコレ秋田県ブースの写真が3面にあります。)



秋田ブースへの来場風景

# 木材腐朽菌のリグノセルロース分解戦略

特任助教 元田 多一

リグノセルロースとは樹木の細胞壁に由来する天然高分子であり、多糖であるセルロースおよびヘミセルロースと、芳香族高分子であるリグニンから構成される。その中でもリグニンは化学的に安定した高分子であり、自然界では白色腐朽菌と呼ばれる菌類によってのみ分解される(図1)。



図1 白色腐朽菌によるリグニン分解。  
腐朽前のブナ材(左), 腐朽後のブナ材(右)

白色腐朽菌の祖先にあたる菌類は、約2億9千5百万年前にリグニン分解

に必須な酸化還元酵素であるマンガンペルオキシダーゼ(MnP)を獲得した可能性が高いと報告されている。この時期は、石炭紀末であることから、白色腐朽菌の出現が石炭紀の終焉を引き起こした可能性があると考えられている。

木材腐朽菌は腐朽材の色によって白色腐朽菌と褐色腐朽菌に大別される(図2)。

先に述べたように、白色腐朽菌はリグニンを分解することができるため、腐朽材には多糖類が比較的多く残り、その色は白くなる。一方で、褐色腐朽菌はセルロースおよびヘミセルロースを分解し、腐朽材には腐朽過程で変性したリグニンが残存し、その色は褐色になる。褐色腐朽菌は、MnPなどの酸化還元酵素を利用したリグニン分解機構の代わりにフェントン反応(二価鉄と過酸化水素を反応させて強力な酸化剤であるヒドロキシルラジカルを発生させ



2 白色腐朽(左)と褐色腐朽(右)

る反応)という非酵素的酸化機構を発達させており、リグニンを分解することなく、多糖類を分解できる。

また、白色腐朽菌と褐色腐朽菌では、分解対象の樹種が異なり、一般的に、褐色腐朽菌は針葉樹を、白色腐朽菌は広葉樹を好んで分解することが知られている。針葉樹と広葉樹のリグニンを比較すると、構成単位・結合様式に明確な違いが認められる。針葉樹リグニンは主にグアイアシル(G)型から構成されている一方、広葉樹リグニンはG型に加えてシリングル(S)型を多く含む。S型は芳香環の3位および5位にメトキシ基(-OCH<sub>3</sub>)を持つ(図3)。S型を多く含む広葉樹リグニンは比較的開裂しやすいβ-O-4結合の頻度が高く、分解されやすい。

以上のことから、白色腐朽菌は、比較的分解が容易なリグニンを含む広葉樹を主な腐朽対象とし、酵素を用いてリグニンと多糖を特異的に分解する腐朽戦略を示すのに対し、褐色腐朽菌は針葉樹を主な腐朽対象とし、

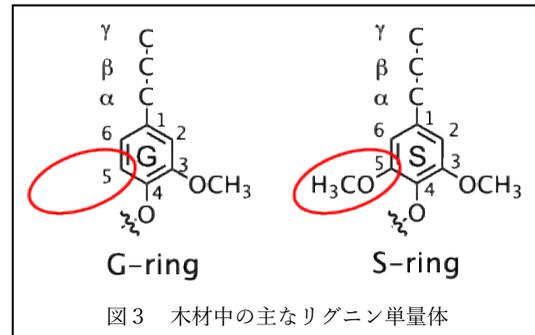


図3 木材中の主なリグニン単量体

フェントン反応によって強固な針葉樹リグニンを分解するのではなく変性させつつ、加水分解酵素を用いて多糖を分解する戦略へと進化したと考えられる。

また、白色腐朽菌に関しては、リグニン分解と多糖分解を切り替えながら腐朽を進行させると言われている。実際、白色腐朽菌である*Grifola frondosa*(マイタケ)の原木栽培を研究対象とし、フーリエ変換赤外分光法(FT-IR)を用いて4年間の栽培期間における原木の成分組成変化を解析したところ、「リグニン分解(0~2年目)→多糖分解(2~3年目)→リグニン分解(3~4年目)」というように、リグニン分解が優勢な時期と多糖分解が優勢な時期が繰り返されることが示された。今後は、この分解対象の切り替え機構の解明に取り組む予定である。

## 研究成果を全国へ発信

### 木材学会広島大会での木高研関係者の発表テーマ

◇第76回日本木材学会大会が3月16日から18日までの3日間、広島市の広島大学東広島キャンパスで開催されました。会期中に秋田木高研関係者が取り組んでいる研究テーマや研究成果が発表されました。

#### 《口頭発表》

- ・内層ラミナの空隙の有無によるCLTの曲げヤング率の影響 ○須佐拓真、野田 龍、山内秀文
- ・X線CT画像を用いたパーティクルボード物性予測モデルの構築 ○陳 碩也、山内秀文ほか
- ・非木材植物原料ボードの耐腐朽性に及ぼす原料特性と製造条件の影響 ○永井雅也、元田多一、山内秀文ほか
- ・干満差の大きな海域での木材の暴露試験～暴露開始後10年までの変化～ ○野田 龍ほか
- ・イチョウ二次木部細胞に特徴的な突起状構造の形態と組織内配列 ○工藤佳世、高田克彦ほか

#### 《ポスター発表》

- ・ブナ二次木部における放射組織サイズの水平変動パターンに関する画像解析 ○荒川 泉、工藤佳世、高田克彦
- ・モンゴル北東部に生育するシベリアカラマツの肥大成長の気候応答:北東斜面と北西斜面の比較 ○SHEN YUDONGほか
- ・製造因子の異なる超厚合板の水平せん断性能 その2 ○岡崎泰男ほか
- ・バイオ製炭時に発生する温室効果ガス排出量の検討 ○栗本康司、渋谷 栄ほか

# WOODコレクション(モクコレ)2026 展示状況



秋田スギを利用した壁面・床板シリーズ



立木でシンボリックな森をイメージ



樹木の幹を秋田スギ合板で仕上げました



思わず手にしたくなる木製のこだわり



支援学校の生徒による各種の木工品も



スギのCLT加工は山脈(やまなみ)を表現



DLT(スギ板の木ダボ接合)によるベンチ



立体感を生み出す組み合わせが新鮮です

## 夏前まではB材の供給減が続きそう

## 盛り上がりが少ない製品の需要

秋田県原木需給会議は、秋田スギ原木の生産・供給側とそれを受けて製材・加工する側とが意見交換をして情報の共有を図っています。秋田県の呼びかけによるもので、最終的に需給のギャップをいかにして解消していくかを目指します。令和7年度の第3回会議が2月2日に秋田市で開催されました。席上述べられた現状報告と当面の見通しについて、その概要を紹介します。

原木需給会議は素材生産側の秋田県森林組合連合会、秋田県素材生産流通協組、米代川流域森林・林業活性化協組、東北森林管理局、川中の需要者サイドである秋田県木材産業協組連合会、秋田県木材チップ工業会といった団体のほか、製材業の秋田製材協組(アスクウッド)、門脇木材、中国木材能代工場に加えて合板メーカーの秋田プライウッド、新秋木工業の県内ほぼ全域と業種をカバーする11の企業・団体・官庁で構成されています。



## ◇A材は供給増、B材は供給不足か

秋田県がおこなった「A・B材の需給アンケート」の結果から、令和8年2月から7月までの半年間の見通しについて需要者側は、中国木材能代工場、アスクウッド、門脇木材のほか秋田県木連傘下の製材工場を合わせて、A材は2月が22,240m<sup>3</sup>、3月が23,850m<sup>3</sup>、4月24,120m<sup>3</sup>、5月23,600m<sup>3</sup>、6月22,820m<sup>3</sup>、そして7月が22,620m<sup>3</sup>の計139,250m<sup>3</sup>が必要となっています。

供給見通しは秋田県森連、秋田県素材生産流通協組(素流協)と東北森林管理局からの委託材を合わせたもので、2月が24,790m<sup>3</sup>、3月が25,480m<sup>3</sup>、4月25,810m<sup>3</sup>、5月24,360m<sup>3</sup>、6月23,290m<sup>3</sup>、そして7月が23,64m<sup>3</sup>の計147,370m<sup>3</sup>となっています。「A材は供給が需要を上回る見通し」となっています。

B材は、秋田プライウッド、新秋木工業、中国木材、アスクウッド、門脇木材を合わせて2月から7月までの需要見通しが合計344,710m<sup>3</sup>。供給見通しは前記3者の事業体で合計232,925m<sup>3</sup>となっています。つまり「需要に供給が追いつかず、111,785m<sup>3</sup>の不足が見込まれる状況」だと報告されました。A・B材をまとめると、需要見通しが483,960m<sup>3</sup>あるのに対して供給は380,299m<sup>3</sup>であることから、合計では103,665m<sup>3</sup>の供給減になると見通されます。



## ◇2月以降は民有林材の生産が進む

12月は秋田県森連傘下の各流通センター合計で3,600m<sup>3</sup>の出品だった。これらは完売。1月は7,300m<sup>3</sup>の出品で12月のほぼ2倍という出品量だったが、こちらもほぼ完売。出来値は1月に入っていくらか弱含んでモノによっては若干下げ気味のものもあった。それでも平均では通常のA材でm<sup>3</sup>15,000~16,000円での取引だった。

各森林組合の現場では、国有林材の生産請負作業も12月から個々の組合の生産現場での作業に入っている。一部では広葉樹の生産に切り替えているところもあるが、2月は例年どおりの生産・出材が見込まれる。3月に向けては「森林組合が決算期に入るので、民有林材の生産が進むと見られる」一方、「県北地方を主体として大雪の影響が出てきていることの懸念もある」とされました。



## ◇国有林材の生産請負は1月でほぼ終了

秋田県素流協の報告では、「国有林材の生産請負が1月まで続いたところもあるが、月末までにはほとんど終了。今は各事業体の持ち山や森林組合・林業公社などの請負作業をしている」とされた一方、「今冬の積雪によって現場では雪下ろしや林道の除雪などに時間がかかっている」実情も語られました。

その上で「春先に向けて川中の需要者は原木在庫を増やすことも必要になると思うが、事業体にはとくに安全に配慮しながらの出材をと願っている」とのことでした。



## ◇中国向けは軽微な欠点に大きなクレームも

4 秋田スギ原木の輸出と中国木材能代工場への納材を担っ

ている米代川流域活性化協組は、最近の原木輸出について「昨年一年間の輸出量は秋田・船川港管轄で約47,000m<sup>3</sup>。現状の港頭在庫は約8,000m<sup>3</sup>。これまでは大きなロットで輸出する対応だったが、最近ロットを小さくしてリスクを回避する動きが強くなっている」と受け止めています。

中国側からは、「これまで問題になっていなかった軽微な欠点についても、大きなクレームとなって返ってくる。それだけ現地の状況があまりよくないのではないかと分析します。令和7年の入荷は12月までで21,000m<sup>3</sup>。径級は8~16㍉の小径木が10,000m<sup>3</sup>、5㍉材が9,000m<sup>3</sup>であることから大半が小径木。その上で「実際の商況は依然として厳しい」と見えています。

中国木材能代工場への納材状況は、10月に9,400m<sup>3</sup>、11月が7,600m<sup>3</sup>、12月が13,000m<sup>3</sup>ということで今年度の4~12月分としては122,000m<sup>3</sup>となっています。これと輸出の数量を合わせると、前年度のトータルと合わせてまずはほぼ同等の量になるほか、ランク別の内訳は、「A材が23%、B材65%、C材11%。こちらも前年度比で大きな変化はない」と結びました。



## ◇A材が不足でB材購入で対応した工場も

昨年の春先から原木不足が続いていたとする秋田県木連からは、「少し落ち着いてきている。原木不足から製材工場の中には高くなったA材ではなくB材を購入して対応している工場もあった」という例を報告、これまでは見られなかった製材工場の原木不足への対応ぶりを紹介していました。

不足が目について価格も高騰していた3.65㍉の中目(24~28㍉)材については、「m<sup>3</sup>16,800円程度まで下がったが、価格水準としてはまだ高い」と見えています。同時に「国有林材は今年に入ってから3.65㍉材も供給してもらっている。今後も継続していただきたい」として量的な安定供給を望む見解が述べられました。

製品の荷動き・市況については、「依然として動きが鈍く、価格も希望する水準まで値上げできない。まさに原木高の製品安という状況」を訴えながら、「為替の円安傾向で外材の入荷も厳しくなっており、国産材利用が今後も進む」との見方を示しました。しかし、「需要の大宗を占める住宅着工戸数が減少傾向にある。今後の需要創出は非住宅や公共施設、商業用店舗などへの展開が不可欠。県でもこの観点から今後も積極的な取り組みを願いたい」と述べられました。



## ◇九州では春から製品価格値上げの機運

一昨年の10月から製材工場を稼働させている中国木材能代工場は、「原木の入荷に合わせて量を抑え気味にしている。加工(集成材)工場はフル生産の状況」とした上で「バイオマス発電は計画どおり2027年1月から商業運転を開始する」と、今後の予定について語りました。

原木は、一昨年の10月から入荷を始めて徐々に増えていたが、「昨年10月からは入荷が減っている。そうした厳しい実情か  
(次ページへ)

(前ページから)

ら11月以降は定時の稼働とし、あとは休日出勤はなしとかラインを一つしか回さないという形で減産対応をしている」現情を報告。それでも「12月の後半から多少入荷が増えてきたことから、現在はフル稼働の状態。県外からの原木入荷はまだ少なめで、ここしばらくは前年度の実績を下回っている」とのことでした。

また、「加工工場は本格稼働してから1年が経つ。集成管柱という製品づくりも徐々に固まりつつある。ラミナの品質や長さについては、原木の価格を見ながら製品に反映させている」。能代工場のメイン製品である集成管柱は、「能代工場の製品も伸びている。積層間柱の販売も好調。ヨーロッパ産製品、とくにWW製品の価格上昇と入荷の減少で、代替としぎの集成管柱、間柱そして小割が国産材にシフトしてきている」と好調な売行き背景についても言及しました。

ただ、「ハウスメーカー間の競争も激化していることから、製品価格の値上げにはかなり厳しい」と見えています。主な販売先であるプレカット工場向けも単価をなかなか上げ切れない。そんな中、「九州では多くの製材工場が春に向けて製品価格を上げていこうという気運が高まっている。われわれもこうした気運に対応していけるよう、その行方を注視している」と語りました。

○

#### ◇スギの原木は3材の集荷に苦戦

アスクウッドは、「原木仕入れは1月が8,000m<sup>3</sup>強だった。前月よりいくらか下回っているが、若干の積み増しとなった。これにより現在の在庫は8,000m<sup>3</sup>の後半」、「販売先は県外向けが8割、県内が2割」という同社は、材長が3材、4材、3.65材の3種。製品別では、3材、4材が各4割、3.65材が2割という計画だが、「この10年間の実感としては、3材の集荷に最も難儀している」と語ります。

また、「今年の冬は雪が多いこともあって製材効率が上がらない。一応は2シフトでのフル生産だが、原木は月に8,000m<sup>3</sup>強の消費量。製品は小割類もフル生産だが、乾燥から製品化という流れが思うようにいかず、四苦八苦している」と付け加えて、原木の仕入れ量が計画を下回ったほか、製品の生産量は月に3,000～4,000m<sup>3</sup>に止どまったと述べていました。

○

#### ◇正月明けの大雪で原木の入荷が厳しい

門脇木材協和工場は、製材量は「月に5,700m<sup>3</sup>から6,000m<sup>3</sup>。冬場は1,000m<sup>3</sup>ほど落として4,500～5,000m<sup>3</sup>。製品は3材から間柱、4材材は羽柄材が主体」です。10月ごろは在庫が約5,300m<sup>3</sup>とほぼ1ヶ月分まで回復していた。その内訳は3材が2,000m<sup>3</sup>、4材材が3,300m<sup>3</sup>くらい。入荷先は国有林のシステム販売、また委託販売など。残りは近隣の業者から自社の伐採班が取得して伐ったもの。12月から2月にかけての原木在庫も約1ヶ月分をキープしている。

「今年も国有林材の生産請負が始まるまでには約1ヶ月半分以上の在庫を確保したい。しかし、正月明けからの大雪で入荷は非常に厳しい。1月は計画の約7割に止まった。仕入れはほぼ自社伐採班からの原木を充てている。長級別では3材材中心の入荷で、1月末の在庫は3材が2,800m<sup>3</sup>、4材が2,600m<sup>3</sup>となっている」と語ります。

雪の影響はかなり深刻。通常、原木を置くところに雪が積み重なっていることから土場が非常に狭くなっている。今後もこんな状況であれば原木入荷計画の見直しも考えなければならぬ」としていました。

○

#### ◇合板は販売面でなお厳しさづく

合板工場でも昨年12月後半以降、雪の影響で原木入荷がスローダウンしている。新秋木工業では、「1月はスギ、カラ松とも予定数量は未達という状況。合板の市況は、あまり芳しくない。

したがって原木も生産に合わせた入荷という格好になる」と、このところの現状を語ります。

工場の生産キャパは80万枚(3×6・12<sup>3</sup>換算)までは持つていけそうな状況。ただ、人員の数が足りない。キャパ以上の生産というわけにはいかない。少ない生産量での利益追求を念頭に置いている。「今後も、これまでと同じ感じで原木の集荷は淡々と進めたい」と語っていました。

秋田プライウッドは、「合板は生産調整を3年半ほど継続している。製品在庫は0.8ヶ月分程度として維持し、このあたりを適正在庫として生産を続けてきた。ここで生産量というのは販売できる量のこと。在庫は常に0.8ヶ月を維持してきた」と述べました。

2025年1～12月の実績は、出荷量が前年比で114%であった。ただし、2024年には大きな設備投資に伴う工事があって能力ベースでは前年比で23%の減産をした1年であった。これに比べての114%という実績であるので、実質的には13%減とのこと。需要環境については、「2025年の新設住宅着工戸数は全国で74万667戸であり、床面積の減少に加えて住宅機器や建築資材などの価格高騰の影響で、住宅価格は高くなっている。こういった実需に対して合板は供給過剰感があり、価格面では厳しい状況下に置かれている」と見えています。

このため、「価格を少しでも引き上げたいが、他のメーカーの安い価格に引きずられてしまう。とくにこの冬場は需要が少なくなってきたので、またまた価格が下がってきている」として価格への反映が難しい現状を語りました。

○

#### ◇夏場対策で5月連休明けまで在庫を積む

秋田プライウッドは原木について、「令和7年(1～12月)は45万m<sup>3</sup>が入荷した。フル生産をしていた時には55万～60万m<sup>3</sup>の入荷があったが、令和5～6年に2割の減産をおこなった。令和7年は久しぶりに51万m<sup>3</sup>の入荷があり、そのほとんどを消費した。一時的に減産が緩んだという状況だったが、フル生産時に比べればまだ10%前後の減産」という実情を語りました。

そして今年、「年が明けて1月の前半には入荷ペースが半分ということで、また減ってきた。どこの事業体も降雪量が多かったためか、なかなか始動が遅かったが、全体としては予定どおりのスギ、カラ松の入荷となった。1月はスギの入荷が向浜で計31,000m<sup>3</sup>、カラ松が4,000m<sup>3</sup>、トドマツ3,000m<sup>3</sup>の入荷があったことで月当たりの消費量分は確保できている」と現状を語ります。

その上で、「5月の連休明けごろまでは月3,000～5,000m<sup>3</sup>というプラスαの在庫を積み上げた。今年も2月からはもう少し入荷を進めていく。40,000m<sup>3</sup>の在庫で春を迎えると、昨年のように20,000m<sup>3</sup>の在庫しかなかった夏場に苦しむことはないのではないか」との見通しを披露しました。

○

#### ◇中国向け段ボール原紙が今ひとつ

秋田県木材チップ工業会からは、昨今の製紙業界の動向が語られました。それによると、「中国向けのダンボール原紙の輸出が今ひとつで、今も状況が改善していない。その分、製紙工場は段ボール原紙の生産をいくらか落としている。その代わりとして、外材を使った洋紙用のパルプを国内向けに生産している」といったことなどです。

このため秋田県内の製紙工場のチップ在庫がかなり増えた。ただ、年末年始にはほぼフル稼働状態になってきたことから、チップ在庫も通常ペースに戻っている。今後は3月まで通常のフル消費の体勢に持っていきたいとしているとのこと。ただ、「もしかすれば3月の決算期に向けた在庫調整や、4月に予定されているボイラーの点検が3週間ほどかかるので、それに向けた在庫調整でチップ工場には迷惑をかけることになるかも知れない」とも語りました。

## 栗本教授が新所長に就任



秋田県立大学(福田裕穂学長)は4月1日付けで人事異動を発令、木材高度加工研究所の所長には栗本康司教授が就任することとなりました。任期は令和8年4月1日から2年間。木高研の第7代目所長となります。

栗本氏は奈良県出身で京都大学農学部林産工学科卒。東京大学農学部で農学博士の学位を取得しています。1995年に秋田木高研助手となり、助教授、准教授を経て2011年4月から教授。専門は木材化学加工、木材炭化学ほか。

## 高田氏は秋田県立大学の副学長・理事へ

3月末で秋田県立大学・木材高度加工研究所の教授(所長)を退職する高田克彦氏は、4月から公立大学法人秋田県立大学の副学長・理事(研究・社会貢献担当)に就任します。高田氏は木高研の6代目所長を3期6年間務めました。

なお、COI-NEXT(共創形成支援プログラム)およびSMBCなど木高研が中心となって実施しているプロジェクトに関しては、引き続きプロジェクトリーダーとしてその進捗管理の責任者を務めます。このため木高研には月に数回は来所することになります。

### ◇木高研特任助教の元田氏は北海道大学へ

木高研の元田多一特任助教は4月1日付けで北海道大学へ転ずることになりました。同大学の大学院農学研究基盤研究部門森林科学分野林産製造学研究室に配属されます。

### ◇柴田参与は秋田県東京事務所へ

木材加工推進機構の柴田悟参与は、4月1日付けの秋田県定期人事異動で秋田県政策企画部東京事務所あきた売込み課 副主幹として転出することになりました。

後任には同日付けで千葉智晴秋田県農林水産部園芸振興課野菜・畑作・特用林産チーム副主幹が転入することになりました。

### 推進機構の理事会

## 令和8年度の事業計画案などを承認

3月9日午後1時半から木高研研修室で秋田県木材加工推進機構の理事会が開催されました。8名の理事のうち5名が出席。予定されていた①令和7年度事業収支予算の補正について、②令和8年度事業計画及び収支予算・資金調達および設備投資の見込みについて、③借入金の限度額の設定について、④顧問の選任について、⑤諸規程の一部改正等についての議案を審議し、いずれも承認されました。

令和8年度は、これまでの当機構の自主事業の継続実施とあわせて、秋田県からの受託により秋田県産材の利用拡大に関する事業を実施し、秋田県木材関連産業の振興につなげていきたいと考えています。



### 令和8年度 お知らせ(開催予定の行事・会議情報など)

- 4月1日(水) 令和8年度 秋田県辞令交付式(県庁)
- 4月6日(月) 秋田県立大学の入学式(秋田市)
- 4月13日(月)、14日(火) 秋田県森づくり推進課担当者会議(秋田市)
- 4月21日(火) 木高研の第1回所内会議(木高研)
- 4月27日(月) 木高研と秋田県、能代市との連絡調整会議(木高研)

## 木材加工推進機構の事業をご利用ください

### 1 顧問による情報提供活動、経営へのアドバイス

賛助会員企業などからの要請を受け、推進機構の顧問が直接訪問して情報提供や経営へのアドバイスなどを行います。また、業界団体等が主催する講演会や研修会の講師も受け付けております。

### 2 技術コンサルタントによる指導

木材に関する知識及び経験を有する専門家を「技術コンサルタント」に委嘱しており、木材関連企業の技術向上のお手伝いをいたします。製品開発や製造工程に関する技術的なことなどお気軽にご相談ください。

### 3 依頼試験の実施

企業などからの依頼を受けて「強度」「含水率」「接着性能」「ホルムアルデヒド放散量」など各種試験を木材高度加工研究所の協力を得て行っています。詳細は当機構のWEBサイトをご覧ください。